

日本中国学会賞選定の結果ならびに理由

韓淑婷「佐久間象山の『喪礼私説』について―幕末における『家礼』受容の一例」

本論文は、佐久間象山の『喪礼私説』が『家礼』受容においてどのような特色を有し、その執筆の背景にはいかなる意図があったのかを考察したものである。

近世日本における『家礼』受容に関しては、近年、吾妻重二氏・田世民氏らによって大きく研究が進展し、本論文は、このような研究の潮流を踏まえながら、今後の『家礼』受容研究の指針となり得る高い水準に到達している。

本論文は前半で、具体的な儀節を取り上げて、象山が『家礼』の説に拘泥せず、日本の風習を積極的に取り入れていることを示し、このような改変が『中庸』の「死に事うること生に事うるが如くす」に依拠していることを論じる。近世日本社会において、『家礼』をそのまま実践するのは困難であり、時勢・風俗に適合するように修正を加えることは一般的である。そのため『家礼』の影響下にある江戸期の著作を『家礼』と比較して、その修正点を列挙することは、労力こそかかれ、難しい作業ではない。問題はそれらの修正を貫く思想的な特色を抽出できるかにある。本論文は、死者を生者の感覚に引きつけて理解するという象山の喪礼論の一貫した特色を明らかにしており、優れている。

また、本論文は、喪礼での写真の使用を説くなど、象山が洋学の知識に基づいて、『家礼』の改良を試みたことを検討する。象山の「東洋道德、西洋芸術」といった主張はよく知られているものの、彼の思想の中で儒学と洋学がどのように関連していたのかについては、十分に検討されてきたとは言い難い。本論文に紹介された事例は、象山の学問のあり方を考える上で示唆に富んでいる。

本論文の後半は、『喪礼私説』の執筆意図を分析する。当初、象山は同時代の習俗とは異なる儒礼の実践に対して懐疑的であったという重要な指摘の後、『喪礼私説』が、文久二年の幕府宛の上書で展開されている象山の政策論と関係していることを明らかにする。上書において象山は、日本の国力が西洋諸国に及ばない理由を僧侶などの「遊民」が多いことに求め、「遊民」問題の解決策として儒式の喪祭礼の導入を主張している。また、キリスト教の禁制を徹底するためにも、寺檀制度よりも儒礼による教化の方が効果的であると象山は説く。さらに、彼は「上下尊卑」の社会秩序を明らかにするために、この儒式の喪服制度の導入を強調し、上書にも『喪礼私説』の「成服」の条を抜き出して添付している。

このような点から、本論文は、象山は喪礼を「政治的課題」として位置づけていたと結論づけている。儒学的思考においては、礼と政治とは結びついており、本論文の見解は、当たり前のことの再確認のように見えてしまうかもしれないが、そうではない。象山が幕府に上書を提出した文久二年は、坂下門外の変、和宮降嫁、島津久光の率兵入京と政治的緊張が著しく高まった年であり、かかる情勢下において象山が儒式の喪礼の制定に熱心であったことを本稿は示したのである。儒礼の受容が限定的であった日本において、近代前夜の時期に儒礼が政治的文脈の中で注目されたということは、多くの人々にとって意外であろう。本論文は、『家礼』受容史だけでなく、江戸末期の思想状況に対して、新たな視点をもたらしたものであると評価できる。日本における近世近代移行期を「西洋化」と「中国化」の同時進行であると捉える見方とも、本論文は接続可能であり、議論の射程は長い。

本論文は以上のような卓越した点を有しており、構成もよく練られ、文章も明晰である。よって、日本中国学会賞を授与するに相応しい論文であると考えられる。